

Ritsumeikan Asia Pacific University

立命館アジア太平洋大学 [ニューズレター]

vol.2

March 1998

CONTENTS

- p1 ● ピーター・F・ドラッカー博士より立命館アジア太平洋大学へメッセージ
 p2 ● クレティエン・カナダ首相、アドバイザー・コミッティに就任/アジア太平洋地域で学び、未来を拓く
 p3 ● アジア太平洋研究センターだより
 p4 ● アジア太平洋研究センターだより/アジア太平洋大学の構想-その2/What'S「立命館」
 p5 ● 広がるアジア太平洋地域のネットワーク-各国訪問グループの報告から
 p6 ● Ritsumeikan & Beppu City NEWS

A JOURNAL REPORTING PROGRESS OF RITSUMEIKAN ASIA PACIFIC UNIVERSITY
 西暦2000年4月開学予定

ピーター・F・ドラッカー博士より立命館アジア太平洋大学へ メッセージ

一 経営学、文明評論の世界的な泰斗、
 ピーター・F・ドラッカー博士より
 立命館アジア太平洋大学の趣旨に賛同し、
 メッセージが寄せられました。



右：ピーター・F・ドラッカー博士
 左：坂本和一
 立命館アジア太平洋大学
 学長予定者

What Ritsumeikan Asia Pacific University is going to do - to integrate the Asia-Pacific region through advanced education - is the most important task in the world economy and world society. It promises to provide the region with the human foundation for its economic success.

My best wishes,

Peter F. Drucker
 Claremont, California
 February 9, 1998

立命館アジア太平洋大学が成し遂げようとしていること、すなわち高等教育を通じてアジア太平洋地域を融合することは、世界の経済や社会にとって最も重要な仕事です。それによって、この地域の経済的成功を達成するための、人間的基盤が築かれるのです。(ピーター・F・ドラッカー)

P R O F I L E

Peter F. Drucker

米国クレアモント大学大学院教授。経営学、文明評論、経営コンサルティングの世界的な泰斗。

1909年、オーストリア・ウィーンに生まれる。ドイツ・フランクフルト大学で国際公法の博士学位取得。

ナチスの迫害を逃れて、英国、さらに米国に渡る。1939年『経済人の終わり』、42年『産業人の未来』を著し、ナチスを分析したものとして好評を博す。また45年、GMの組織革新を分析した『会社という概念』を刊行し、当時の企業革新に大きな影響を及ぼす。

1950年ニューヨーク大学教授に就任。1954年『現代の経営』、64年『創造する経営者』、67年『経営者の条件』など、今日では古典となった著書により経営学者として名声を博す。

その後、69年『断絶の時代』、74年『マネジメント』、76年『見えざる革命』、85年『イノベーションと企業家精神』、89年『新しい現実』、90年『非営利組織の経営』、93年『ポスト資本主義社会』、93年『すでに起こった未来』など、その都度世界的に大きな話題を巻き起こした多数の著作を著し、今日も精力的に著作活動を続けている。その多くは、すでに20カ国以上の言語に翻訳されている。

1971年よりクレアモント大学大学院の社会学、経営学の教授となり、現在に至る。



クレティエン・カナダ首相、 アドバイザリー・コミッティ に就任



立命館アジア太平洋大学設立の趣旨に賛同し、さまざまな協力や助言をいただくためにアドバイザリー・コミッティを結成し、アジア太平洋地域の各国元首や駐日大使、日本を代表する企業のトップの方々にご参加いただいています。この2月、新たにジャン・クレティエン カナダ首相に名誉委員就任を承諾いただきました。各国駐日大使の方々も含め、アドバイザリー・コミッティにご参加いただいている方々は、この3月で210名になりました。

I am pleased to accept your offer to serve as Honorary Advisor to Ritsumeikan Asia Pacific University.

Ritsumeikan's objective of promoting International academic collaboration through bringing together academics and students from across the Asia-Pacific region is both intriguing and compelling. The region encompasses a vast diversity of cultures, languages and races. Just as nations are now developing an economic association, through APEC, to bridge these differences, so too must universities bring greater awareness and understanding to this rich, but complex regional diversity. It is to your considerable credit that Ritsumeikan has set itself what should be a most rewarding goal.

I congratulate you on the formation of Ritsumeikan Asia Pacific University.

Jean Chrétien, Prime Minister of Canada

立命館アジア太平洋大学アドバイザリー・コミッティ
の名誉委員に喜んで就任いたします。

アジア太平洋地域から広く研究・教育者や学生を集め、国際的な学術協力を進めようという立命館の目的は素晴らしいもので、深く共感します。この地域は、非常に多様な文化と言語と人種を擁しています。丁度現在、国家が、APECを通じて経済的な協力関係を深め、この地域内の差異を埋めようとしているように、大学も、この地域の豊かな、しかし複雑な多様性に関する認識と理解を深めるために寄与すべきです。高邁な目標を掲げられた立命館は大変立派であると考えます。

立命館アジア太平洋大学の設立を祝します。

カナダ首相 ジャン・クレティエン

アジア太平洋地域で学び、未来を拓く



学校法人立命館常務理事(教学担当)
立命館アジア太平洋大学副学長予定者
理学博士・教授・産業技術史

慈道 裕治

アジア太平洋地域は、中国やインドなど、古代文明発祥の地を有し、長い歴史と伝統、多様な文化と実り多き自然に恵まれた地域です。多様な文化と歴史を持ち自然に恵まれたこの地域は「豊かな地域」であるといってもいいでしょう。そしてまた、多くの地域や国が海域による交流を通して多面的な発展を遂げた歴史を持っています。たとえば、日本は、中国や韓国から文字や文化を受け入れ、それらを同化し、自らの文化を生み出すとともに、近代的社会として成長してきました。どの地域をとっても、同様に、文化的な交流と独自の文化を生み出した歴史をもっています。

アジア太平洋地域は急速な成長を遂げてきました。いま一部の地域で経済的な困難が生じていますが、その基本的な方向に変わりはない

でしょう。しかも、その発展においては、過去への厳しい反省、価値観の相克や融合、新たな価値の創造など、新しい交流と融合や自立の過程が進むでしょう。そこで私たちが経験する事柄は、国際社会において解決を迫られる先端的な課題であり、グローバル化する世界にあつてますます普遍性を増す課題でもあります。

21世紀社会において、国際的な協力の下で、アジア太平洋地域の可能性を切り開き、この地域の社会的な成長を促すのは若者の役割でしょう。アジア太平洋地域にあつて世界の若者が同じキャンパスで学ぶことの意義はここにあります。私たちは、このような歴史的事業に参画するために、立命館アジア太平洋大学の2000年4月開学に向けて着実に準備を進めています。



立命館アジア太平洋大学設置委員会事務局長
工学博士・教授・環境経済・政策学

仲上 健一

アジア太平洋学への誘い

アジア太平洋
研究センターだより



「アジア太平洋学」という新しい学問が、いま生まれようとしています。長い間、欧米社会を中心に政治・経済・文化・学問がきずかれてきました。21世紀を目前にして、世界の中心舞台はアジア太平洋地域へと変わりつつあります。アジア太平洋地域は、豊かで美しい自然・生態と多様な文化、価値観、言語、宗教、社会構造を有しています。また、人口増加、経済成長とダイナミックな発展をとげ、これまで想像できなかったような社会がいま生まれつつあります。例えば、2025年には世界の巨大都市（人口500万人以上）のほとんどは、アジア太平洋地域に出現すると予測されています。

この、わくわくするようなアジア太平洋地域には、どうしても克服しなければならない課題があります。それは、アジア太平洋の地域の現状を深く理解することを基本としながら、アジア太平洋地域社会の未来を創造するために真剣に取り組むべき課題です。

① アジア太平洋地域の多様な社会システム、地域システムの独自性、共通性を総合的に理解するとともに人類社会の持続的・平和的發展を構築するためのネットワークの形成。

② 人口急増が予測されるなかで、人間の生存環境とりわけ、巨大都市

での生活環境を維持し、さらに快適にするために地域システムの構築や社会資本等の整備の充実。

③ アジア太平洋地域の特性を基本とした、産業（情報メディア・観光など）の創造と展開および、アジア太平洋地域の成長を保証するために最も必要とされている生産技術、環境技術の開発。

④ 成長するアジア太平洋地域の企業を中心としたマネジメントの革新を図り、欧米的経営手法と日本的経営手法の特徴を取り入れた、アジア太平洋地域の企業経営に適応したマネジメント手法の開発。

これらの課題を解決するためには、これまでの個別学問領域や地域研究では限界があります。アジア太平洋学は、「多様性と独自性」、「共生と発展」、「ネットワークと交流」の視点を基本としながら、「政策志向型」、「問題解決型」の、ダイナミックな学問を目指します。

2000年4月に立命館アジア太平洋大学は誕生します。ここでは、世界50カ国以上の将来のリーダーたちと一緒に、新鮮な「アジア太平洋学」についての君の意見を待っています。

アジア太平洋研究センター客員教授からのメッセージ

立命館アジア太平洋大学は21世紀の教育モデル



金 政炫

立命館アジア太平洋大学設置委員会顧問
アジア太平洋研究センター副所長(客員教授)
工学博士 元韓国環境庁次官

今、地球上のすべての領域で、次の世紀を催促するが如き、変化の波が、目には見えないが、じわじわと押し寄せてくるのを感じさせます。今、私達は、短くは10年、永くは100年、もっと永くは1000年先に思いを馳せながら、21世紀を迎えようとしています。

現代社会は、コンピュータネットワークの発達した高度のハイテク社会であります。単純作業や危険な仕事はコンピュータが請負い、人間が「人間らしい」仕事に専念できる環境が形成されつつあります。学校法人立命館が新たに立命館アジア太平洋大学を設立するのも、こうした流れの一環であろうと思います。

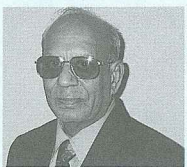
2000年4月に開学を予定している立命館アジア太平洋大学には、それぞれ生活、文化、言語、宗教、思想および思考が異なる異文化圏の若者たちが、世界50カ国から、毎年400名ずつ集まります。彼らは、日本人学生400名と同じ教室で、個人を尊重し、相互理解を深め、解決すべき問題をそれぞれの角度から研究し、議論します。そしてこれを通して、未知の世紀における「新たな人間社会の創造」、世界の恒久的平和の構築と人間社会の恒久的繁栄に寄与する指導者、中核人物に

なるべき人材が養成されると期待されます。

これまでの世界の大学は、ほとんどが論理、記憶、分析等をつかさどる左脳の活用だけを偏重していたのですが、立命館アジア太平洋大学は、想像力、創造力、直感力および実行力などを働かせる、右脳の活用も同時に重要視する教育をすすめます。これによって、不確実性やあいまいさなどにもうまく適応できる能力をつけさせます。この新大学は、巨視的な指導者を養成する、21世紀の新しい教育のモデルとなることでしょう。

世界にはさまざまな一流大学があり、数百年の歴史をもつ大学もあります。そして、それらの大学の卒業生はそれぞれ社会での指導的立場にあります。立命館アジア太平洋大学は新設ですが、それらの大学よりもずっと優れた教育内容、教育方法、教育システムの導入と、多様な入学制度、整備された奨学金やインターンシップ制度などによって、特級の大学として世界に君臨することでありましょう。

“THE UNIVERSITY OF TWENTY-FIRST CENTURY”



サティア・ブッシュナ・ヴァルマ博士

ジャワハラル・ネルー大学(インド)
東アジア言語センター名誉教授

21世紀はもうすぐそこに来ています。20世紀は瓦礫と戦争、流血の世紀でした。また我々は、今世紀に2つの世界戦争と、核兵器やその

他の殺人兵器の開発、経済の不均衡を経験してきました。技術革新と経済のグローバル化に伴い、今後のより良い世界秩序を構築するため、

世界はいま平和と国際協調を必要としています。古代からのインド哲学では、世界で人類がひとつの家族として平和、幸福、繁栄のうちに生きていかねばならないと説いています。この目的を達成するためには、多様な文化や社会間の相互理解を図る必要があります。

アジア太平洋地域は急激に変化しており、新しい世界の枠組みの中におけるその重要性は無視できないものとなっています。技術面で最先端をいく日本は、アジア太平洋地域の発展に重要な役割を果たすだけでなく、世界秩序の構築に多大な貢献ができるような人材をも擁して

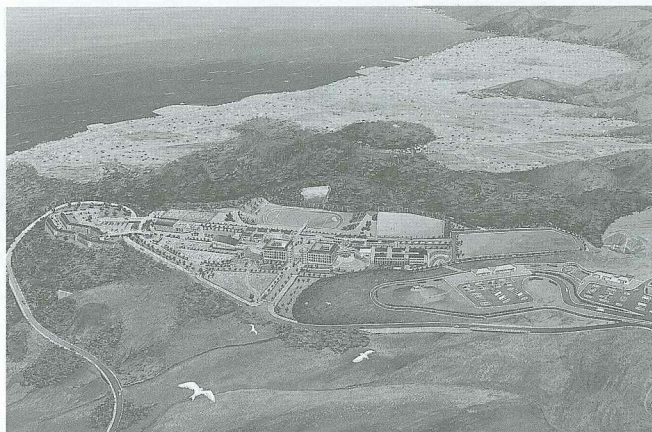
います。いま建設中のアジア太平洋大学がこのような認識を高め、21世紀のニーズに見合った人材を育成するための世界的な拠点として、大きな目標にむけて前進を始めたことは、まさに時宜にかなったものと信じています。

新しく誕生するアジア太平洋大学を心から歓迎するとともに、アジア太平洋地域をはじめとする世界中のあらゆる国々から集まった若い人材がこの大学の強みとなり、平和と協調、有効に溢れた国際社会の発展に寄与することを切に願います。

立命館アジア太平洋大学のキャンパス

アジア太平洋大学の構想—その2

1997年10月18日にキャンパス造成工事の起式を行ってから、現在までに防災工事をほぼ終え、キャンパス用地の全体像が明らかになりつつあります。APUキャンパスは、教育・学習・研究のゾーンと、学生の諸活動のゾーン、生活のゾーンなどが、巧みに組み合わされた、長時間滞在型のキャンパスとして計画されています。また、自然環境との共生も重要なテーマとしており、キャンパスの入口付近には、植物貴重種の移植・保存エリアとして活用できるアメニティゾーンを大きくとっています。中央の広場からは、別府湾（太平洋）を



のぞむことができる、豊かな眺望をもったキャンパスです。

各施設は、空間にゆとりをもたせており、多言語ラウンジを配置するなど、学生の交流と成長を促すための数々の工夫が凝らされています。

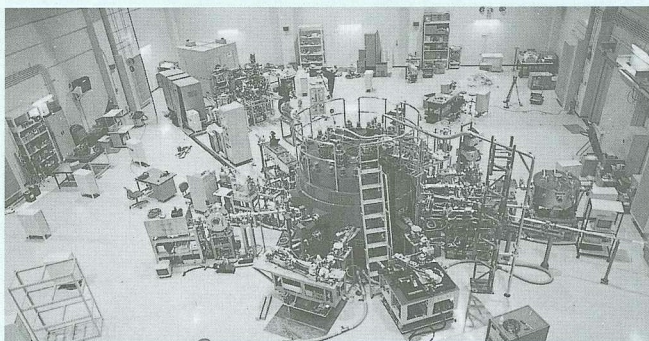
また、最先端の情報機器を多数配置するなど、マルチメディアを駆使した情報発信型の教育をサポートします。

同時に、地域に開かれたキャンパスでもあります。ホールやグラウンドを使ったさまざまなイベント、講演会などによる、地域への開放と交流の接点としての役割の発揮が期待されます。

日本の最先端をいく立命館の産官学交流事業

What'S 「立命館」

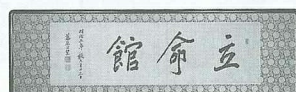
立命館大学は、教育・研究の政策として「国際化」「情報化」とならんで「開放化」を掲げてきています。これまでも、勤労者教育や市民講座などに取り組んできましたが、よりいっそう社会が大学に要請する研究と教育を実現しようと、近年、産官学交流のネットワークづくりを強化してきました。これまでの受託研究、寄附研究や寄附講座、協定科目の設置に積極的に取り組み、そのための社会とのインターフェースとしてリエゾンオフィスを設置しています。びわこ・くさつキャンパスには、産官学の連携による最先端の研究を行うためのテーマ別研究センターを多数設置し、「テクノコンプレックス」と呼ぶ一大研究拠点を形成しています。従来の教員個人と個別企業の結びつきという日本の産学関係を越える、社会科学や自然科学という学問の壁も越える複数の研究分野が、民間企業だけでなくとどまらず公共団体など広く社会と双方向の関係を結んでいます。これらの取り組みに高い関心を寄せていただき、アメリカのシンクタンク「アーサー・D・リトル社」による通産省の調査「産学連携から見た日米技術系大学の比較・評価」（1996



年4月)において日本の大学で第一位の評価もいただいています。立命館アジア太平洋大学においても、アジア太平洋地域の幅広いネットワークを構築し、教育・研究や就職などの共同した取り組みを重視したいと考えています。

「立命館」名称の由来

「立命」という名称は、中国の古典「孟子」の盡心章の一節にある「夭壽貳は、身を修めて以てこれを俟つは、命を立つ所以なり」から採ったものです。その意味は、「人間には、若死にする人もあれば長生きする人もあるが、それはすべて天命で決められていることである。だから、生きている間は我が身の修養（勉強）に努めて天命を待つのが人間の本文を全うすることなのである」という考えをあらわしています。学園名である「立命館」は、人間がその本文を全うするための場所を意味していると解釈できます。



インドネシア

インドネシアにおける立命館アジア太平洋大学の紹介と留学生受入れの行動は、1997年7、8月、同年11月、1998年1月の3次にわたって実施しました。インドネシア教育文化省高等教育総局長 Bambang Soehendro氏をはじめとするインドネシア政府のご支援、在インドネシア日本大使館、国際交流基金ジャカルタ日本文化センター、日本国際教育協会など、日本政府・機関のご協力もあり、大学・高校・日本語学校訪問は順調にすすんでいます。

訪問した学校は、日本語教育課程を持つ大学・短大の内の3大学、公立高校はジャカルタ4校、ジョグジャカルタ2校、私立高校はジャカルタ6校、ジョグジャカルタ2校、日本語学校は4校、合計で21校を数えました。いずれも立命館アジア太平洋大学設立の趣旨・内容について、深い関心を

示していただき、たいへん友好的かつ有意義な話し合いを持つことができました。各校によると、日本への留学希望者があっても、残念なことに、日本語学習と生活費・学費が障壁となって日本留学が実現しない、とのことです。この点では新大学の二言語による教育システム、奨学金制度の充実への期待が大きいと実感しました。

3次までの行動を通じて、留学生派遣のための「協力表明書」には合計13校、推薦留学生71名分の署名を得、民間企業1件2名分とあわせて14件73名分の「協力表明書」という到達点にあります。訪問した多くの学校から、「生徒に直接説明する機会を設けるので、ぜひ説明会を実施して欲しい」との要望をいただきました。「協力表明書」をいただいた高校を中心に、今秋から各高校での説明会を実施する予定にしており、1999年5

月には全国から20万人の高校生が参加するというインドネシア教育文化省主催「教育フェア」への出展も検討しています。また今後はインドネシアの主要な地方都市(スラバヤ、デンパサールなど)や、大分県と友好関係のある西スマトラ州の高校への訪問も行う予定です。

インドネシアから日本への留学生数は約1,000名。アメリカへは12,500名ほどが留学し、また近年ではオーストラリアへの留学が増加しているとのこと。インドネシアで海外留学を希望する多くの方が、経済的にも歴史的にも関わりの深い日本に、そして画期的な構想を持つ立命館アジア太平洋大学で、ぜひ学んでいただきたいと願っています。



立命館アジア太平洋大学の設置について、インドネシアで記者発表

1998年1月23日、ジャカルタ市内のホテル、サリバンパシフィックにおいて、立命館アジア太平洋大学設立の趣旨と内容、インドネシアからの留学生受入れの取り組みを紹介する記者会見を行いました。

会見にはインドネシアの6紙の記者・カメラマンが参加。他に、協力表明をいただいた5校の先生方や日本大使館、国際交流基金ジャカルタ日本文化センター、日本国際教育協会、大分県人会からも出席していただきました。

本学側からは新大学学長予定者の坂本副総長、インドネシアチーム責任者の文学部木村教授が記者発表。出席された現地の高校の先生3名からも力強い賛同・支持のご発言をいただきました。新聞には歓談する坂本副総長、木村教授と協力高校の先生方の大きな写真とともに、「創立100周年を記念して、学校法人立命館が新大学を設立」との見出しが踊りました。

VIET NAM & THE GLOBE

Khay dựng một mô hình trường đại học quốc tế ở Châu Á

Việt Nam và thế giới đang chứng kiến sự phát triển nhanh chóng của các trường đại học quốc tế ở Châu Á. Đây là một mô hình giáo dục mới, mang tính toàn cầu và hướng đến tương lai. Trường đại học quốc tế ở Châu Á đang trở thành một xu hướng phát triển mới trong giáo dục đại học.



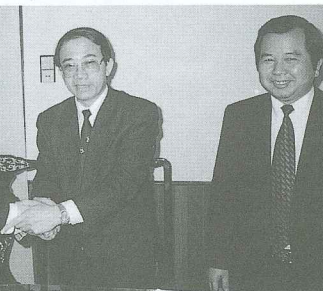
1998年2月27日、立命館大学(立命館アジア太平洋大学を含む)とベトナム教育訓練省(文部省)との間で協定が締結されました。

ヴェトナム教育訓練省との包括協定を締結

協定は、ヒエン大臣(写真右)の立ち会いのもとに行われ、本協定に基づいてニュン国際局長と坂本和一等学長予定者がお互いに協定の意義、内容について有意義な意見交換を行いました。教育プログラム

ラムでは両国の伝統文化の交流を強めたいという意見が出ました。立命館大学とヴェトナムとの関係は長く、これまでの実績を基礎とした、政府と大学という画期的な包括協定が実現しました。

については、教員の派遣や学生の交換についてプログラムの開発についての提案がなされました。また、留学生としてのヴェトナム学生の派遣については、具体的なすずめ方について提案がありました。また、文化プロ



フィリピン

今回の訪問の目的は、①高校・大学への立命館アジア太平洋大学の広報ならびに留学生受入れの可能性の調査、②アカデミックアドバイザー、客員教授就任の可能性についての事前打診、③AYファウンデーションからフィリピンの各高校への広報の依頼、④大学間協定締結についての事前打診、⑤日系企業・比日協会等へのニュースレターの配布ならびに留学生推薦の要請、などでした。デ・ラ・サール大学ユーチェンコ東アジア研究センター所長ヴィリアコルタ教授には、訪問する各高校・大学にあらかじめわれわれ

の訪問のアポイントメントを取っていただきました。訪問に際しても、デ・ラ・サール大学の教員に同行していただき、大変効率よく学校を回る事ができました。数校から生徒推薦の覚書に署名をいただきました。ユーチェンコ駐日大使が設立された、フィリピン国内の高校生を対象に奨学金を支給されているAYファウンデーションでは、フィリピンの約500の高校に対するニュースレターの配布について、クエンコ副会長に快く引き受けていただきました。JETROIには、エスタニスラオ環

太平洋大学学長、ピラタ元首相、マフィオ・フィリピン国立大学準教授、ラウレル3世比日協会名誉会長、その他日系進出企業に対するアポイントメントを取っていただくなど、大変お世話になりました。エスタニスラオ環太平洋大学学長、ピラタ元首相等からアカデミックアドバイザー就任の内諾を得ることができました。広がり深まりつつあるフィリピンでのネットワークを通じて、われわれの訪問目的に沿った成果を挙げる事ができたのは、ご協力いただいた方々(機関)のお陰だと大変感謝しています。われわれ

の行動が立命館アジア太平洋大学への留学生受入れと今後の日本とフィリピンの協力関係の発展に貢献できることを切に望むものです。





「クリスマス冬のHanabiファンタジア」(別府市)に立命館大学生が参加— 応援団が県民・市民と交流

1997年12月23~24日、大分県別府市で行われた「クリスマス冬のHanabiファンタジア」に、立命館大学の応援団チアリーダー部と吹奏楽部が出演しました。このイベントは、毎年15万人以上の来場者を数える別府の冬の風物詩で、今回が4年目。前回は本学から軽音楽部(JAZZ)が参加しています。チアリーダー部、吹奏楽部とも、「市民と一体となって楽しいステージを」と、この日のための特別プログラムを用意、クリスマスソングなどをモチーフに華麗なダンスと軽快な演奏でイベントを盛り上げました。



大分・別府事務所で留学生の宿舍保証 についての学習セミナーを開催

1998年2月9日、立命館の大分・別府事務所において、立命館アジア太平洋大学開学にむけた第2回学習セミナーが開催されました。財団法人福岡国際交流協会の高松正和氏を講師に迎え、「留学生の宿舍保証について—福岡地域留学生交流推進協議会の取り組みより—」をテーマに、県・市・立命館アジア太平洋大学設置期成同盟会の関係者や国際交流ボランティアの市民グループら約40名が参加して行なわれました。参加者から、様々な意見やアイデアが熱心に出されました。



広がる立命館インターナショナル・ アカデミック・ネットワーク

立命館大学と立命館アジア太平洋大学が海外に持っている協定校・機関が、この3月で50機関を超えました。ニューズレター第1号で紹介している46機関に加えて、新たに、韓国の梨花女子大学と蔚山大学、インドのデリー大学とジャワハラルー大学、ヴェトナムの教育訓練省とフエ大学、タイの国立開発行政研究院と協定を締結することになりました。

URL <http://www.ritsumeai.ac.jp/kic/a31/>
E-mail: ritsapu@ritsumeai.ac.jp

RITS
APU
Ritsumeikan Asia Pacific University

〒603-8577 日本国京都府京都市北区等持院北町56-1
学校法人立命館
立命館アジア太平洋大学開設事務局国際課
Tel/075-465-8370 +81-75-465-8370
Fax/075-465-8371 +81-75-465-8371